

高校から大学への日本語学習の継続に関する一考察： 学習者の視点から¹

越山 泰子

ペパーダイン大学

yasuko.koshiyama@pepperdine.edu

柴田 節枝

カリフォルニア州立大学 フラトン校

sshibata@fullerton.edu

Students' Perspectives on Articulation Between Pre-College Japanese and College Japanese

Yasuko Koshiyama

Pepperdine University

Setsue Shibata

California State University, Fullerton

Abstract:

This paper concerns articulation from high school to college in the area of Japanese language instruction from the learners' perspectives. A survey was conducted among 96 high school students currently taking Japanese and 84 college students who have taken Japanese in high school and are continuing their Japanese studies. The results of the survey indicated that the one-third of the college students felt that the transition from high school to college was not smooth and the curriculum and instruction offered at high school are not necessarily preparing high school students to shift smoothly to the college level of instruction. However, high school students claimed to enjoy Japanese classes, which tend to focus more on cultural knowledge and hands-on experiences and their positive experiences are psychologically motivating these students to continue their studies. Based on the survey findings, the following recommendations are made: 1) College instructors need to do a more precise assessment of pre-college learning; 2) High school teachers and college teachers need to foster a better understanding of curriculum and instruction at both levels, which will create a more student-centered learning environment.

1. はじめに

アメリカでは、1980年代後半から1990年代前半にかけて日本語学習者の数が増加し、それに伴い高校から大学への日本語学習の継続に関する問

題が様々なところで取り上げられてきた。学習者が次の学年または次のレベルに進むにつれ（本稿では高校から大学）、学習内容を円滑に積み重ねていく事が出来るような、いわゆる効率のよい教育システムを英語で *articulation* と呼んでいるが、日本語ではそれに該当する適当な言葉がなく、アメリカの日本語教育の分野では「アーティキュレーション」と英語をカタカナの言葉に直して使用されている（本稿では以降「効率のよい学習の継続」を表す言葉として「アーティキュレーション」を使用）。Greenberg (1992) は、アメリカの教育における高校教育と大学教育の格差は根本的な経営や運営のあり方、教師の待遇や決定権の違いなどの上に、歴史的に受け継がれた分離性などが重なって生じたものであると述べているが、その格差は適切な計画性と目的を持って対処すれば克服できるとも指摘している。National Association of District Supervisors of Foreign Languages (1995) は、外国語教育のアーティキュレーションを語る際、縦の関係だけでなく、横の関係、すなわち各教育機関や教師がカリキュラムを独自に計画、遂行するのではなく、学校や教室を越えたレベルで相互に呼応し、足並みを揃える努力をしなければならないと述べている。また、1996年に作成された外国語教育全般の「ナショナル・スタンダードズ」(The National Standards in Foreign Language Education Project 1996) を元に、日本語教育の全米共通の基準となる「ナショナル・スタンダードズ」(The National Standards in Foreign Language Education Project 1999) が1999年に紹介されてからは、「ナショナル・スタンダードズ」を枠組みとしたカリキュラムの作成に積極的に取り組む州も出てきた。

しかし、意外にも日本語教育に関するアーティキュレーションの問題を取り上げた調査、研究は比較的乏しい。Jordan & Lambert (1991) によると、高校で日本語を学習した学生は、しなかった学生より日本語の成績がよかったという結果が報告されているが、Watt (1994) の調査では、その2つのグループの成績の違いは僅差でしかなかったと報告されている。Kinoshita,

Chikamatsu & Kinoshita (1994) は、高校で日本語を履修した学生の半数が次のレベルを大学で履修するには準備不足であると答えており、高校から大学への移行が必ずしも円滑とは言えないと報告している。小学校から高校までの日本語教師達からは、大学の日本語教育はペースが速すぎる、漢字の数が多すぎる、といった声があがっている反面、大学の教師達からは、高校を終えるまでに、大学で継続するに値する十分な日本語の知識を身につけていない、という報告もある (George Washington University 2002)。

Jordan & Lambert (1991) は、日本語を教えている小、中学校の校長と日本語教師、及び高校で日本語を学習している生徒、高校で日本語を学習した経験を持つ大学生に対して行ったアンケートをもとに、1) 教師養成プログラムの拡充、2) 高校レベルでの実験的モデルスクールの設置、3) 最新の言語学習目的論に基づいた、大学レベルでの革新的なカリキュラムの開発、4) 高校、大学レベルでの学習者減少に関する研究の奨励、などを提案している。

今回の調査は、学習者の視点からアーティキュレーションの問題を再考する試みとして実施された。元来アーティキュレーションとは、教師が学生を効果的に該当のレベルに振り分け、知識や技能を積み上げていく為のトップダウン的なシステムであるが、本調査は学習者自身の経験や意見をもとに、ボトムアップ的なアプローチによって今後取り組むべき問題を提議し、より効率的なアーティキュレーションを視野に入れた日本語教育を考えるのが目的である。さらに、昨今の大学において日本語学習者、特に上級に進む学習者が減少する中、如何に高校からの日本語学習を継続させていくかという動機付けを考える上での参考にもなり、将来より高度な日本語力を備えた学習者の育成にもつながると考える。

2. 調査

2.1 調査項目

本調査の調査項目の概要は、次の通りである。

調査項目 1. 1) 現在日本語を学習している高校生、2) 高校で日本語を学習し、大学でも継続して日本語を学習している大学生、この2グループの日本語の学習動機と学業成績における特徴の調査。

調査項目 2. 現在日本語を学習している高校生が、高校の日本語教育についてどのように考えているかの調査。

調査項目 3. 高校で日本語を学習し、大学でも引き続き日本語を学習している大学生が、高校から大学の日本語クラスへの連携(アーティキュレーション)についてどのように考えているかの調査。

2.2 調査対象・方法

アメリカカリフォルニア州都心部にある3つの高校(公立2校、私立1校)で日本語のクラスをとっている高校生96名と、高校から引き続き日本語のクラスを履修している12の大学(公立の短大2校、公立の4年生大学8校、私立の4年生大学2校)の大学生84名を対象に、それぞれ匿名のアンケート調査を行った。

アンケート用紙はそれぞれ高校生用、大学生用を用意した。高校生用アンケートの質問項目として、1) 学習者の母国語 2) 日本語の学習期間 3) 日本語学習の動機 4) 日本語力の自己診断 5) 高校の日本語及び全体の学業成績 6) 高校の日本語クラスへのコメント 7) 将来日本語学習を継続していく意思の有無とその理由、8) 大学の日本語教育に何を期待するか、の8項目を用意した。大学生用では、1) 学習者の母国語 2) 日本語の学習期間 3) 日本語学習の動機 4) 日本語力の自己診断 5) 高校及び大学での日本語と全体の学業成績 6) 高校及び大学の日本語クラスの難易度 7) 高校から大学へのアーティキュレーションが円滑

であったかどうか 8) 大学で日本語学習を継続してよかったか 9) 高校での日本語学習を振り返って、どんな点を改善してほしいと思うか 10) 大学での日本語クラスについて、どんな点を改善してほしいか、の10項目の質問を用意した。学習の動機に関する質問は、Gardner (1985) の質問項目を参考にした。

アンケートは高校生2名、大学生2名にパイロットテストをした後、必要な修正を加えて使用した。アンケートの実施は、各高校、大学の日本語クラスを担当している日本語教師に依頼した。アンケートの集計結果から、調査に参加した高校生の日本語学習期間は平均約3年2ヵ月、大学生の場合、高校での学習期間の平均は2年7ヵ月、大学では1年2ヵ月であった。学習者の母国語は、高校生の場合、英語64名(66.7%)、中国語18名(18.8%)、韓国語6名(6.2%)、日本語4名(4.1%)、スペイン語3名(3.1%)、無回答1名であった。大学生では、英語63名(75%)、中国語13名(15.4%)、日本語2名(2.3%)のほか、韓国語、インドネシア語、ベトナム語、カンボジア語、ポーランド語、無回答がそれぞれ1名ずつという結果であった。

3. 結果

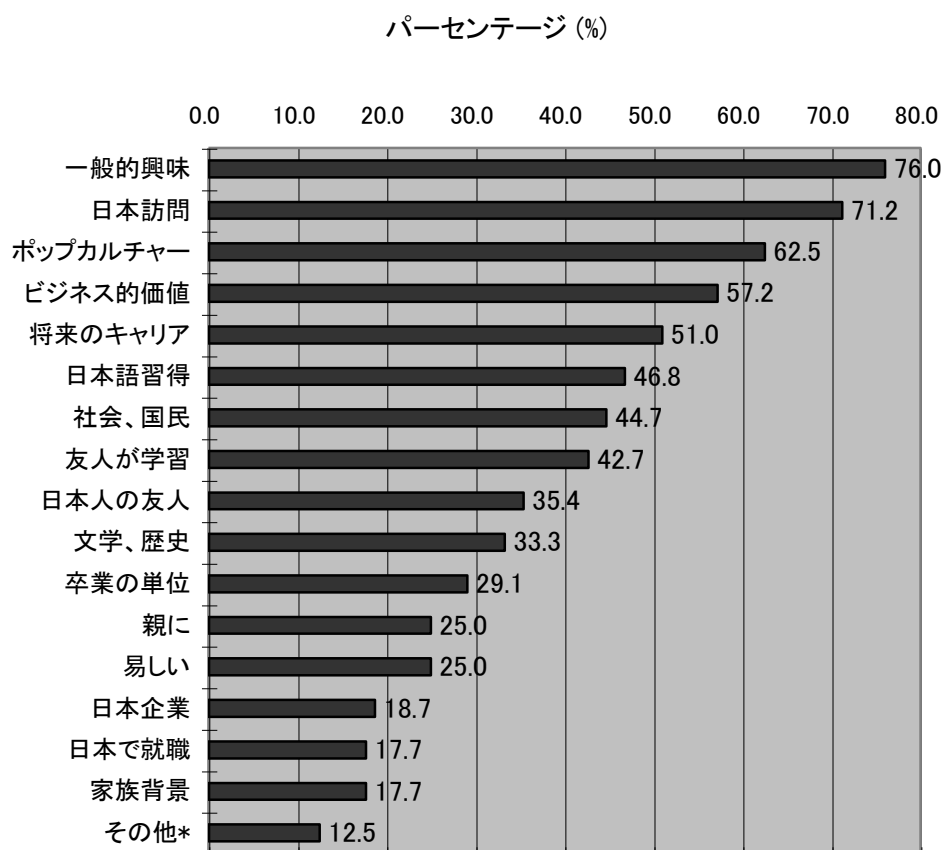
3.1 調査項目1

3.1.1 日本語の学習動機

高校生の日本語の学習動機で主だったものは「日本への一般的な興味」(73名、76%)、「日本への訪問希望」(69名、72%)、アニメやJポップに代表される「ポップカルチャー」(60名、63%)であり、日本語そのものを学びたいという「日本語の習得」(45名、47%)以上に強い動機であることが明らかになった。また、日本語学習が将来何らかのビジネスに結びつくと考えており(「ビジネス的価値」55名、57%)、将来のキャリア選択にもプラスになる(「将来のキャリア」49名、51%)と期待しているが、それが必ずしも日本での就職(「日本で就職」17名、18%)や、日本企業で働きた

い（「日本企業に就職」18名、19%）という具体的な目標に結びついているとは言えない。さらに、高校生では友人関係の影響が少なからず見られ、「両親に勧められたから」（24名、25%）、自分自身が日系出身であるから（「家族的背景」（17名、18%）という理由より、「日本人の友達がいるから」（34名、35%）「友人が日本語をとっているから」（41名、43%）という理由の方が多かった（グラフ1参照）。

グラフ1： 高校生の学習動機(N=96)

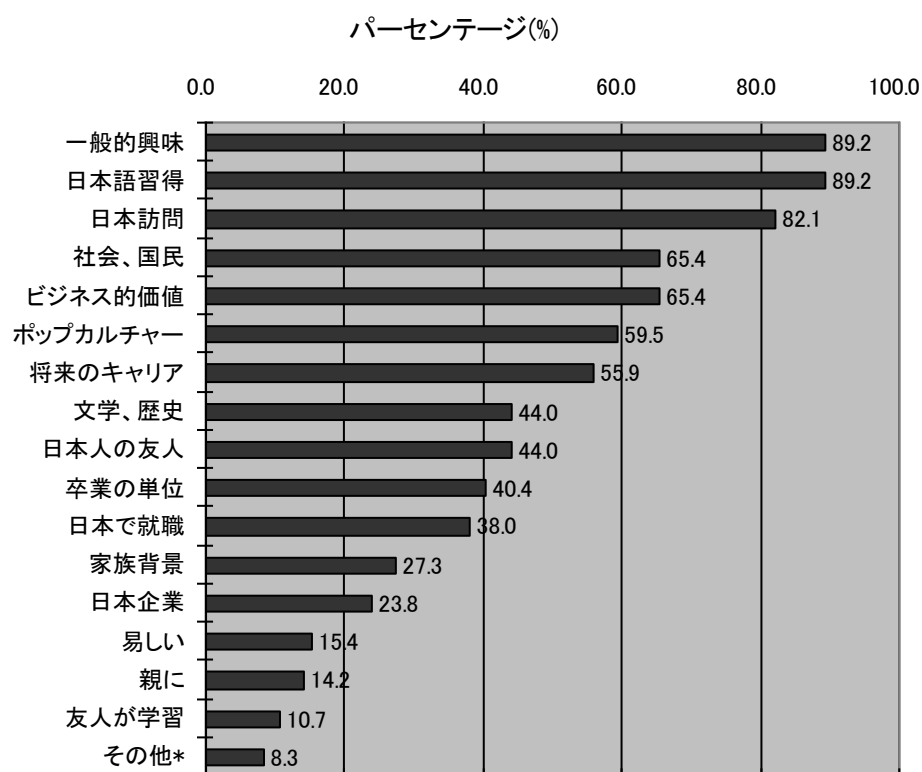


*その他：「姉妹が日本語をとった」、「日本食が好き」、「スペイン語やフランス語以外の外国語を学びたかった」、「日本のビデオやゲームが好き」、「間違えた」等。

大学生を対象にした調査結果では、「一般的な興味」（75名、89%）や「日本への訪問希望」（69名、82%）といった、高校生の回答結果と似通った動機が多かったが、同時に「日本語を学びたい」という言語習得の動機も非

常に高く（「言語習得」75名、89%）、これは高校生の回答結果と大きく異なっていた。また、言語に対する興味だけでなく、日本の社会や日本人に対する興味（55名、65%）も比較的高かった。さらに、高校生の回答結果と同様、「将来何らかの形でビジネスに結びつくと思うから」（「ビジネス的価値」55名、64.5%）、「将来のキャリアにプラスになると思うから」（「将来のキャリア」47名、55.9%）といった漠然とした動機が、「日本で就職したい」（32名、38%）や「日系企業に就職したい」（20名、23.8%）というより具体的な動機を大きく上回った。自分自身が日系であるから、といった「家族的背景」（23名、27%）や「両親に勧められたから」（12名、14.2%）など家族の影響や、「友人が取っているから」（9名、11%）等に代表される友人の影響も、大学生になるとかなり低くなっていると言える（グラフ2参照）。

グラフ2: 大学生の学習動機 (N=84)



*その他：「姉妹都市関係のため」「高校であまり学べなかったため」「メキシコ系で日本語を学習している人が少ないので、挑戦したい」等。

全体として、学習者の多くは日本と関係のある仕事に従事することや家族の影響、卒業の単位に必要なだからといった具体的な動機より、日本に関する一般的な興味、将来日本に行きたい、自分の仕事に何らかの形で役立たい、日本のポップカルチャーに興味がある、などといった比較的漠然とした動機から日本語を学習していると推察できる。また、大学でも学習を継続している学生の多くは、個人的な娯楽（アニメ、ポップカルチャーなど）だけでなく、言語や日本社会、国民性にも興味、関心を向けていると言える。

3.1.2 日本語学習と学業成績

表1に示すように、高校で日本語を学習している高校生の全体の成績と日本語の成績は、4.0を最高としてそれぞれ3.41、3.31であった。

表1： 全体的学業成績と日本語の成績の平均と標準偏差

	平均	標準偏差
高校生		
全体学業成績	3.41*	0.50
日本語の成績	3.31	0.89
大学生		
高校での全体的学業成績	3.52	0.54
高校での日本語の成績	3.51	0.69
大学での全体的学業成績	3.28	0.45
大学での日本語の成績	3.40	0.78

*成績は4段階式で、「4」が最高。

また、高校から引き続き大学でも日本語学習を継続している大学生の、高校での全体の成績及び日本語の成績は、それぞれ3.52、3.51であり、大学での全体の成績と日本語の成績は、それぞれ3.28、3.40であった（上記、表1参照）。

表2は、大学生の高校での全体の成績、高校での日本語の成績、大学での全体の成績、大学での日本語の成績、の4項目間の相関関係を示した表である。有意差が見られたのは、高校での日本語の成績と高校での全体の成績、高校での全体の成績と大学での全体の成績、高校での日本語の成績と大学での日本語の成績、そして高校の日本語の成績と大学の全体成績の4項目であった。反対に、高校の全体の成績と大学の日本語の成績、及び大学の日本語の成績と大学の全体の成績の2項目には有意差が見られなかった。

表2： 大学生の高校及び大学での学業全体の成績と日本語の成績の関係

	<u>高校全体</u>	<u>高校日本語</u>	<u>大学全体</u>	<u>大学日本語</u>
<u>高校全体</u>	1.00	--		
<u>高校日本語</u>	0.25*	1.00	--	
<u>大学全体</u>	0.45**	0.22*	1.00	--
<u>大学日本語</u>	0.06	0.45**	0.22	1.00

**Significant at .01 level.

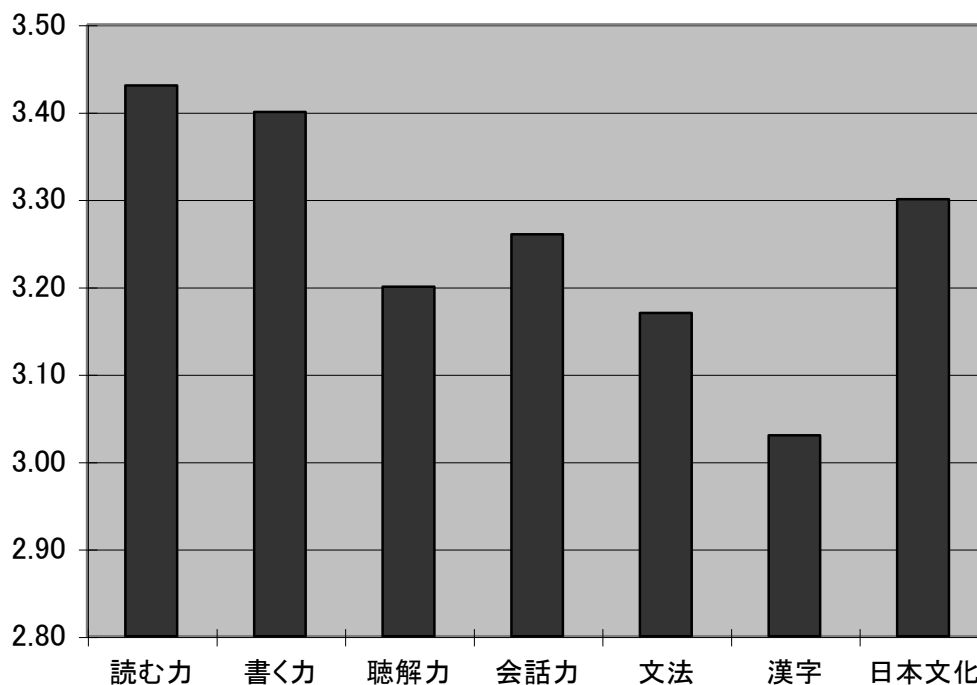
*Significant at .05 level.

3.2 調査項目2

3.2.1 日本語力の自己評価

高校生に、各日本語の分野における到達度の自己診断を尋ねたところ、5段階評価で自己診断の値が高かった順に「読む力」(3.43)、「書く力」(3.40)、「日本文化の知識」(3.30)、「会話力」(3.26)、「聴解力」(3.30)、「文法」(3.17)、「漢字」(3.03)であった(グラフ3参照)。他の分野に比べて漢字はやや自信がないという結果ではあったが、全体的には7分野全てにわたって3.0(まあまあ)以上であり、分野による大きな違いは特に見られなかった(グラフ3参照)。

グラフ3: 高校生の日本語技能の自己評価(5段階評価)



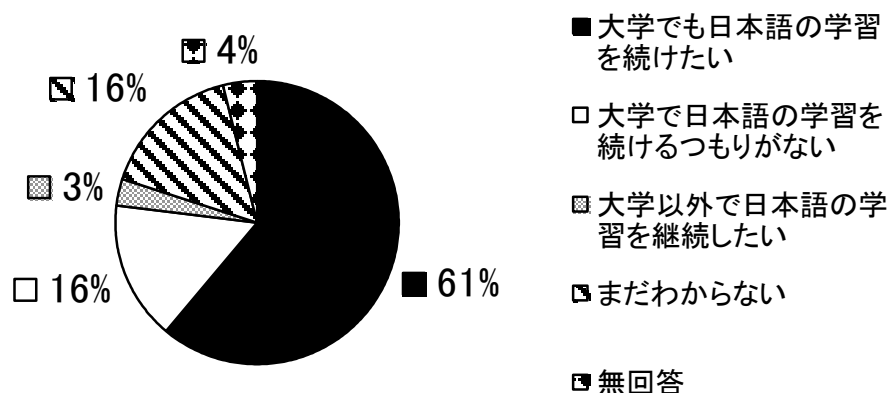
3.2.2 将来の学習計画

グラフ4は、大学で日本語の勉強を続ける意思があるかどうかという質問の回答結果である。グラフ4が示すように、「引き続き大学の日本語のクラスを取りたいと思っている」が96人中59人(61%)、「大学で日本語の勉強を続ける気はない」15人(16%)、「大学の日本語のクラスは取るつもりはないが、日本語の勉強そのものは続けたいと思っている」3人(3%)、「わからない」15人(16%)、「その他」4人(4%)であった。これにより、回答者の3分の2以上が、大学で日本語のクラスをとるかどうかにかかわらず「今後も日本語の学習を続けたい」という意思を持っていることがわかった。

大学で日本語を続ける意思がないと答えた15人にその理由を聞いたところ、「文法が難しすぎる」(8人)、「日本語に対する興味がなくなった」

(7人)、「他の言語を学んでみたい」(7人)、「漢字を覚えるのが大変」(5人)という回答であった。その他(14人)の回答としては、「おもしろくないと聞いている」「むずかしいらしい」といった先入観からくるものや、「専攻科目に集中したい」「日本語を取る時間がないと思う」など、大学のスケジュールとの兼ね合いを考慮したものや「大学では親からのプレッシャーがない」「将来特に日本語を必要としないと思う」といった、自主的な判断による理由が挙げられた。

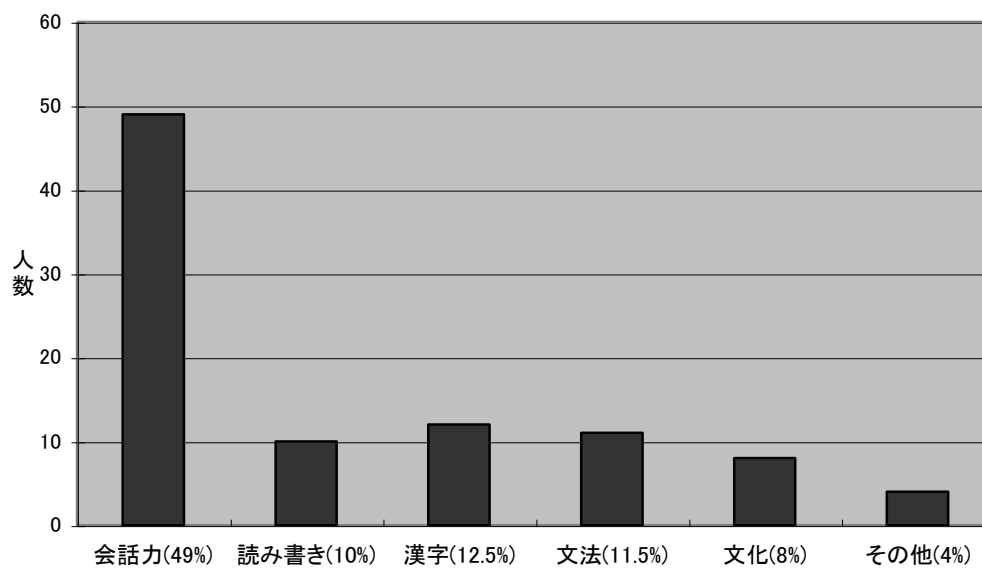
グラフ4: 高校生の将来の日本語学習計画



3.2.3 大学での日本語教育への期待

「大学でも継続して日本語のクラスを取るつもりである」と答えた59人に大学の日本語の授業に何を期待するかを聞いたところ、「聞く、話すなど、会話力の向上」が49人(51%)、「読み書きの向上」10人(10%)、「漢字」12人(12.5%)、「文法」11人(11.5%)、「日本の文化」8人(8%)、「その他」4人(4%)という結果であった。グラフ5が示すように、半数以上が「会話力の向上」を最も期待しているということがはっきりした。

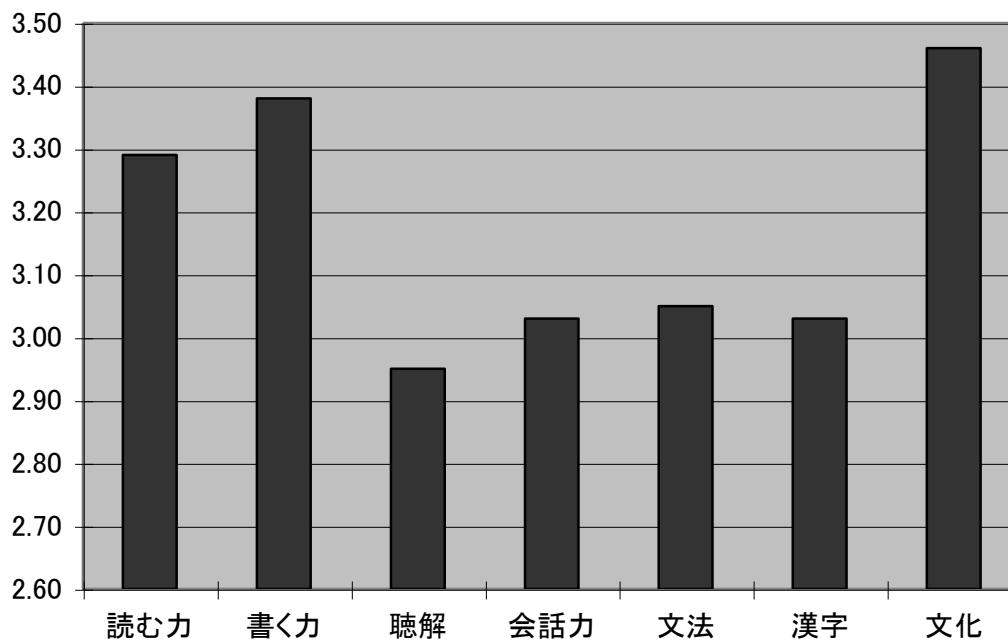
グラフ5: 高校生の大学における日本語教育への期待



3.3 調査項目 3

3.3.1 日本語力の自己評価

グラフ6: 大学生の日本語技能の自己評価 (5段階評価)



グラフ6に示したように、大学生へのアンケートでは自己評価が高かった順に「日本文化の知識」(5段階評価で3.46)、「書く力」(3.38)、「読む力」(3.29)、「文法」(3.05)、「会話力」(3.03)、「漢字」(3.02)、「聴解力」(2.95)であった。読み書きの自己評価が7つの分野の中でも高かったのは高校生の回答結果と同じであるが、大学生では「日本文化の知識」が最も高くなっている。また、高校生がどの分野も「まあまあ」と答えたのに対し、大学生では「聴解力」の自己評価が低かった。

3.3.2 高校から大学へのアーティキュレーション

高校から大学への日本語教育のアーティキュレーションがスムーズであったかどうかという質問では、「スムーズであり、問題なく希望のクラスに入れた」が84人中24人(29%)、「まあまあスムーズであり、ほぼ希望のクラスには入ったが、高校で学んだことを大方忘れてしまっていた」34人(40.5%)、「スムーズとは言えず、もう一度下のレベルからやり直す必要があった」24人(29%)であった。このうち、スムーズでなかった理由として、「高校では大学で必要とされる日本語の技能をほとんど習わなかったから」が15人(18%)、「高校ではいろいろなことを学んだが、学んだ内容が大学で必要とされている内容と違っていた」が9人(11%)であった。

3.3.3 高校と大学の日本語クラスの難易度の比較

次に、高校と大学の日本語クラスの難易度の違いについて聞いたところ、84人中50人(60%)が「大学の方が高校より難しい」と答え、23人(27%)は「高校の日本語クラスの方が大学より難しかった」と答えた。また「ほとんど同レベルだと思う」という回答者は11人(13%)であった。全回答者の60%が「大学の方が難しい」と答えているが、アーティキュレーションを縦の「やさしい」から「より難しい」レベルへの移行と考えれば、「大学の方が難しい」という回答は当然予測されるべきであり、「高校の方が難し

かった」、「難易度はあまり変わらないと思う」という回答が 40% にも上ることに、より注目すべきであろうと思われる。

3.3.4 日本語学習の継続

高校から引き続き大学で日本語を履修したことをどう思うか、という問いでは、80 人 (95%) が「日本語の勉強を続けてよかった」と回答し、4 人 (5%) が「続けなければよかった」と答えた。後者の理由として、「これからはスペイン語の方が役に立つと思うので、スペイン語を勉強すればよかった」「日本語を使う機会がほとんどない」「日本語は難しすぎる」などといった理由が挙げられた。しかし、95% が「高校、大学と続けて日本語を勉強してよかった」と答えており、また「大学で日本語を履修しなければよかった」という回答も、理由によっては日本語を使う機会を増やしたり、授業を工夫したりという今後の学習内容やカリキュラム次第では、「履修してよかった」という回答に変わる可能性が十分あるのではないだろうか。

3.3.5 高校と大学の日本語クラスへの感想と提案

高校の日本語のクラスがどうであったかという質問では、回答者の感想は概ね好意的で、「楽しかった」「先生が熱心で親切」という意見が多かった。また高校の日本語クラスへの希望・提案として目立ったものは、「もっと会話や聞き取り練習の時間がほしい」、「文法にも力を入れて欲しい」、「漢字の学習の時間を増やしてほしい」、「読解力をつける練習の時間を増やしてほしい」、「教科書の選択」など、アーティキュレーションを考慮に入れた学習内容に関する要求や、「APクラス (advanced placement class) や特別クラス (honor class) を設けてほしい²」、「試験の回数をもっと増やしてほしい」といった、学習そのものに前向きな回答もあげられた。

高校のクラスが「楽しかった」という一言で表現されていたのに対し、大学の日本語クラスは「大変だった」、「ペースが早すぎる」、「語彙数が多い

ざる」、「復習の時間を増やしてほしい」など、高校と大学の日本語学習内容の違いに関する回答が多かった。内容に関しては「会話や聞き取りの練習時間をもっと増やしてほしい」「文法をもっとわかりやすく」「語彙を教える際、その起源も教えてほしい」「会話体は、ですます体と同時に教えないでほしい」など、授業の進め方、教授法に関する具体的なコメントが得られた。他に、「一回の授業時間が短くなっても、一週間のクラスの回数をもっと増やしてもらいたい」といった、スケジュールをはじめカリキュラムに関係したコメントも得られた。

4. 考察とまとめ

本調査では、高校の日本語クラスをとっている高校生、また高校で日本語クラスをとり、大学でも継続してクラスをとっている大学生がそれぞれどのような動機で日本語を学習しているのか、高校、大学での日本語および全体の成績にはどんな相関関係があるのか、また高校から大学への円滑な連携を念頭において、自分たちが学んできた高校、大学それぞれの日本語のクラスにどんな意見・感想をもっているのかについて調査した。高校生の日本語学習の動機としてはアニメやポップカルチャーの影響が大きく、アメリカの高校生が初めて触れる日本文化がアニメであるという場合も少なくないと思われる。また、高校生の学習動機のもう一つの主な特徴として、友人、家族の影響が挙げられる。日本人の友人がいたり、友人が日本語をとっていたりという環境や、両親の意見や希望などが学習動機を大きく左右している。将来日本語が何らかの役に立つだろうからという理由も、どのように生かしていくかという具体的な計画があるとは言えず、まだ漠然としているようである。大学生になると、日本語の学習動機は言語としての日本語や日本文化に対する興味、また将来日本とつながりのある仕事につきたい、といったような、より具体的な目標をもったものになっていく。さらに、友人や家族の影響は薄れ、自主的な選択をするように

なるといえる。

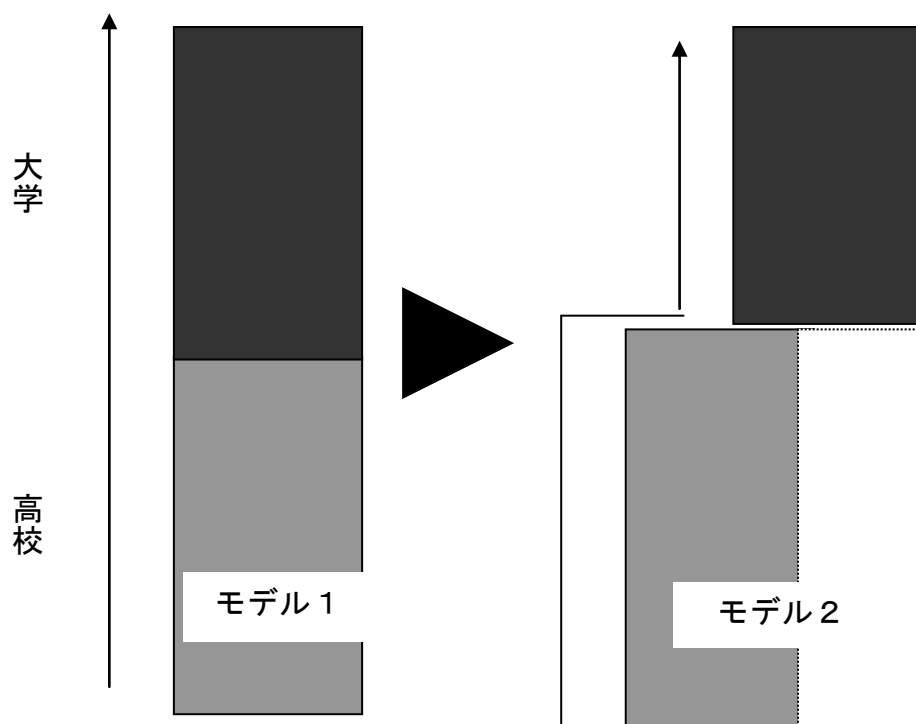
「アーティキュレーション」を学習動機の面から考えた場合、高校生の時に日本語を学ぶきっかけが何であれ、振り返って「楽しかった」「先生が熱心であった」というポジティブな感想を持つことは大学での日本語学習の継続につながっていくと思われる。高校生の大半が「大学でも日本語を継続するつもりだ」、もしくは「大学では取らないが学習そのものは継続したい」、と回答していることは、高校の日本語教師や日本語クラスが概ね高い評価を得ていることの一つの表れでもあろう。

日本語学習者の特徴の一つとして、高校で日本語を学ぶ生徒は概して成績優秀者であるといえる。また、高校の日本語の成績が良かった学生は大学の全体の成績も日本語の成績も良いという傾向がある。日本語は難しいと言われているが、それでも日本語に興味を持ち、敢えてそれを履修するということは学習者がチャレンジ精神を持ち、やればできるという自信があるからかもしれない。「大学で継続する意思がない」の理由の一つに、「大学の日本語は難しいと聞いているから」という理由が挙げられていたが、大学で日本語を継続する場合も学習者がチャレンジ精神や自信をもち続けることが必要であろう。

アンケートでは、3分の1が高校から大学への「アーティキュレーション」が円滑ではなかったと答えており、その主な理由として、「高校で大学の次のクラスに行くために必要な日本語の知識（文法、漢字）やスキルを身につけなかった」が挙げられていたが、高校で重点的に教えている内容や教育方法は、大学とはかなり異なっているという現状がある。今回の調査でも学習者が高校から大学に移行した際、高校と大学の日本語の学習内容の違いに戸惑っている印象を受けた。高校では体験学習（日本料理・茶道など）や日本映画鑑賞・日本庭園見学などの日本文化への理解が重要なカリキュラムの一つである一方、大学ではそのような時間がほとんどなく、教科書に添った、例えば文法事項や漢字の学習といった、日本語その

ものの向上に時間が費やされている (Kinoshita, Chikamatsu & Kinoshita, 1994)。以上のことを総合すると、高校から大学へのアーティキュレーションの関係は、図1のモデル2ように表されると思われる。即ち、高校での日本語教育は、モデル1のような、必ずしも大学できちんとした積み木にするための準備として捉えるべきではないと思われる。

図1： 高校から大学へのアーティキュレーション・モデル



日本語力の向上という点のみでは高校から大学へのアーティキュレーションは必ずしも円滑とは言えないが、高校では日本文化の体験学習などを中心とした日本語のクラスを「楽しんで」おり、日本語学習を続けていこうという意思にもつながっていると思われる。文化の知識は広く日本語学習の一部であり、また学習を継続していくことは、当然ながら日本語力の向上につながっていくのである。

最後に、教師への課題として、高校の教師は生徒達が大学の日本語学習

の内容に対応できるような準備の手助けをし、また大学の教師は日本語学習者が高校で学んできたことを把握・理解する必要があると思われる。そのためには、高校、大学の教師がそれぞれ互いの教育現場について理解しあい、話し合える場をもっと広げていくことが大切であろう。

謝辞

本調査に協力して下さった各高校、大学の日本語の先生方に、この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。

注

1. 本稿は 2003 年度 ACTFL (American Council on Teachers of Foreign Language) 全国大会で発表した原稿に加筆したものである。
2. アメリカの高校では、高校によっては普通クラスのほかに advanced placement class (AP class)、honor class が設けられている。AP class を履修し、AP テストで基準以上の点数を取ると大学の単位として認められる (大学による)。Honor class も普通クラスよりレベルの高いクラスではあるが、大学の単位としては認められない。

参考文献

- Gardner, R. C. (1985). *Social psychology and second language learning: The role of attitudes and motivation*. Baltimore, MD: Edward Arnold Publishers.
- The George Washington University. (2002). *Articulation between K12 and Post-Secondary Japanese instruction*. Town meeting summary. Retrieved September 20, 2003 from <<http://www.gwu.edu/~eall/special/majp02.htm>>.
- Greenberg, A. (1992). *High school-college partnerships: Conceptual models, programs, and issues*. ERIC ED347956, ERIC Clearinghouse.
- Jordan, E., & Lambert, R. D. (1991). *Japanese language instruction in the United States: Resources, practice, and investment strategy*. Washington D.C.: National Foreign Language Center.
- Kinoshita, T., Chikamatsu, N., & Kinoshita, W. (1994). On articulation between pre-college level and postsecondary level. *Breeze*, 9.

- National Association of District Supervisors of Foreign Languages. (1995). *Articulation*. Retrieved October 5, 2003 from <<http://www.nadsfl.org/articulation.htm>>.
- The National Standards in Foreign Language Education Project. (1996). *Standards for foreign language learning: Preparing for the 21st century*.
- The National Standards in Foreign Language Education Project. (1999). *Standards for foreign language learning in the 21st century including Chinese, Classical Languages, French, German, Italian, Japanese, Portuguese, Russian, and Spanish*.
- Watt, Y. I. (1994). From high school level to college level Japanese: First-year students' performance at Indiana University. *Breeze*, 7.